

『歴代寶案』校訂本第十四冊の刊行に際して

沖縄県教育委員会 教育長 大城 浩

沖縄県は、かつて琉球王国として、他県に例を見ない独自の歴史を歩んできました。日本本土や中国、朝鮮、東南アジア諸国からほぼ等距離の位置にある琉球国は、これらの国々との交易を通じ、政治交渉、経済活動、文化交流を行い、大きな影響を受けながら独自の歴史を形成してきました。

なかでも中国（明・清）との進貢・冊封の関係は、沖縄の歴史や文化に大きな影響を与えました。一三七二年（洪武五）、洪武帝は琉球へ使者を派遣して、明の建国を告げ、入貢を促してきました。この要請に応じて琉球国中山王察度は、弟の泰期を派遣して進貢品を納めました。こうして中国との進貢貿易、正式な国家間交渉が始まり、以来、明治初年に至るまで、約五〇〇年間に及ぶ親密で長い交流の時代が続きました。一方、琉球国は、中国との進貢・冊封関係を軸に、十四世紀から日本、朝鮮国、シャム・パタニ（現在のタイ）、マラッカ（現在のマレーシア）、スマトラ・パレンバン・スンダ・ジャワ（以上現在のインドネシア）、安南（現在のベトナム）等の国々とおよそ二〇〇年にわたって交易を展開し、東アジアの一大貿易拠点として発展しました。

これらの国々と交わした外交文書は、原文書あるいは写しや控えのかたちで外交を専任する久米村の天妃宮に保管されてきました。しかし長い年月の間に、これらの文書も破損・散逸の恐れが生じたため、首里王府は久米村にその編集を命じました。こうして一六九七年に『歴代寶案』第一集四九巻が二部作成され、首里王府と久米村にそれぞれ保管されることになりました。この第一集は一四二四年から編集時点の一六九七年までの中国、朝鮮、東南アジア諸国との外交文書が収録されています。その後、一六九七年から一八六七年までの琉球・中国間の文書は、『歴代寶案』第二集二〇〇巻・第三集一三巻として編集され、ほかに別集八冊（うち第二集目録四冊）が編集されました。

首里王府に保管された『歴代寶案』は廃藩置県の際に明治政府に引き継がれたといわれていますが、その所在は依然として不明です。一方、久米村に保管されたものは、一九三三年（昭和八年）に旧県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸しました。

しかし、幸いなことに、この久米村に保管されたものから影印本と写本が数種残されました。

沖縄県は、平成元年度（一九八九年）からこれらの影印本と写本を元に『歴代寶案』の編集事業に着手し、平成三年度（一九九一年）から刊行を開始しました。すでに校訂本を十二冊、訳注本を六冊刊行しております。

また沖縄県教育委員会は、『歴代寶案』の編集に資するため、平成二年度（一九九一年三月）以来、清代の琉球関係檔案史料を所蔵する中国第一歴史檔案館との間で協議書を交わし、琉球関係檔案史料の収集、学術交流を行っております。これまでに中国第一歴史檔案館から提供された史料は『歴代寶案』の校合・校訂等の編集を進展させたのみならず、琉球・中国交渉史の研究の発展に大きく寄与しております。

本年度は校訂本第十四冊（第二集巻一九〇～二〇〇）を刊行することになりました。本書には一八五〇年（道光三〇）から一八五八年（咸豊八）の間の進貢、接貢、謝恩、琉球船や中国船等の漂流、漂着民の送還等、清国を中心とする伝統的な冊封進貢体制の秩序の下で交わされた文書が収録されています。また中国人労働者（苦力）の反乱によって奪取された米国籍ロバート・パウソン号が石垣島崎枝沖で座礁し、三八〇名の苦力が上陸した事件や、太平天国の反乱により北京への進貢が困難を極めたことに関するもの等、アヘン戦争後の清国国内の不安定な状況、せまりくる欧米諸国の「外圧」の影響を受け、中琉関係の新たな局面を映し出す文書等が含まれています。本書が県民をはじめ研究者の皆様の間で幅広く活用されることによって、学術・文化の振興に役立つことを願っております。

最後に、本書の刊行につきましては、沖縄県歴代寶案編集委員会のご尽力、ご協力を得ました。また校訂を担当された西里喜行先生をはじめ、『歴代寶案』の影印本・写本および関連史料を所蔵する国内外の各機関のご協力に心から感謝するとともに、これから『歴代寶案』編集事業に、一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。刊行のことばといたします。

平成二十四年（二〇一二年）十月